

吉川慶一さんのプロフィール

(ほづあい研究所 所長)

吉川さんとのご縁は、私が2010年亀岡で初めて毎月開催の手づくり市を始めるに当たり、地元の日玉作家さんとして白羽の矢を立てたこと。地域の活性化に向けた取組みに共感いただき人肌脱いでくださったことがそもそもです。実直なお人柄と、誰にも負けない「藍」に対する熱い思いが、何といたっても彼の魅力。藍染めの商品といえば、サッカーのワールドカップで日本選手の活躍もあって、「ジャパンプルー」としてTシャツが世界的に大ブレイク。藍の注目が増す中、60歳を契機に、幻の藍・京の水藍を復活させたい、藍を亀岡で育て次世代に引き継ぎたいという思いで、2015年1月「ほづあい研究所」を設立。

聞くと京都駅の南側は100年ほど前まで一面藍畑だったとのこと。その後国策で栽培されなくなったという。幻の藍の種を探し求めて先進地を調べていたところ、たまたま徳島の藍師(注)、佐藤昭仁さんが京の水藍を育てておられるという情報を得、早速会いに出かけるも、少々到着が遅れたこともあり、いきなり「京都人は嫌いや！」と一喝。一時間の説教が始まったという。万事休すかと諦めていたところに、藍研究の大家、京都芸大の内藤名誉教授が共通の知り合いだったことが幸いし、すったもんだの挙句、後日承諾の電話があったことから、すべてが始まりました。種を分けてもらったご恩に報いるべく毎年状況報告を兼ねて徳島まで挨拶に。

今では亀岡市保津町で栽培した「京保藍」ブランドの商品が、パリのメゾンキツネ(藤井大丸にショップ)にて展開、2018年春には「ほづあい研究所」として初めてファッションショーをガレリアかめおかにて開催。加工品の藍茶も本格的に販売予定らしい。今後の目標、「ほづあい研究所」の法人化に向けて、スタッフと共に頑張りたいとの決意がありあり。最後にモットーは、と訊くと、すかさず「藍が育つ保津町 藍があふれる亀岡 藍で愛を育むまちに!」。藍染めが触媒となって、いよいよ元気なまちづくりがバージョンアップします!

(注)「藍師」とは葉藍から染料の薬(すくも)と呼ばれる藍玉をつくる製造業者のこと。



2017.12.19 松尾 清嗣